

氏 名	木 原 志 乃
学位の種類	博 士 (文 学)
学位記番号	文 博 第 257 号
学位授与の日付	平成 15 年 7 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	文 学 研 究 科 思 想 文 化 学 専 攻
学位論文題目	ヘラクレイトス哲学とギリシア医学思想 ——生命と身体における「対立の一致」——

論文調査委員	(主 査) 教 授 内 山 勝 利	教 授 伊 藤 邦 武	助教授 中 畑 正 志
--------	----------------------	-------------	-------------

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、「物質」や「生命」をめぐるヘラクレイトスの根本的洞察を解明し、彼の生命観・身体観が後のギリシア医学思想へと結びついていくその道筋を明らかにすることによって、ギリシア医学に対するヘラクレイトス哲学の思想史的影響と意義を考察したものである。本論は第Ⅰ部（第一章から第三章）と第Ⅱ部（第四章から第七章）からなる。まず第Ⅰ部において、ヘラクレイトスの「流転」「火」「ロゴス」「魂」についての断片研究に基づき、彼の生命理解を解明する。そして第Ⅰ部の考察を手がかりに、第Ⅱ部においては、個々の医学テキストとヘラクレイトス哲学との具体的関連を探究し、ヘラクレイトスの生命観・身体観をギリシア医学思想史の一つの重要な流れのなかに位置づける。

第Ⅰ部（第一章から第三章）では「魂」概念を中心にいくつかの断片解釈の検討を通じて、ヘラクレイトスの生命観・身体観を「対立の一致」のダイナミズムに基づいて解明する。論者によれば、「一と多」「多と一」との同時相即的な調和である「対立の一致」は、その基本に生命原理を置いている。すなわち「魂」や「火」によって説明されている（B36, B30）のは、その他の物質のすべてを統括しつつ全体的な有機的連関のもとに一つのものとして「生きている」という生命現象である。それはまた身体が絶え間ない流転の中に在りつつも、その流転のダイナミズムによってはじめて全体的な有機的連関を保ちながら「生きている」という生理学的変化の説明にも通じている。ヘラクレイトスは「生ける自然」というタレス以来の物活論的自然観に与しながらも、ミレトス派の自然観とは一線を画したところで、生命現象としての身体的活動を、独自のダイナミズムによって説明しているというのが、論者の基本的な立場である。

第一章では流転説に関する従来の断片解釈の問題点を提示し、特に川の流れについての断片が「同一性」や「恒常性」を強調したものではないという点を精査した上で、「火」や運動変化についての断片を吟味することによって、単なる物質の流動主義とは区別された、一と多の「逆説的調和」の上に成り立つ「ロゴス」ゆえの「流転性」が彼の根本的立場であることを確認する。

第二章および第三章では、ヘラクレイトスの生命観・身体観を理解する上で最も重要な「魂」概念について論ずる。彼は、物質のプロセスの中で「魂」を語る一方で、知性的・倫理的な主体としての「魂」についてはじめて言及している点で、ソクラテス以前の哲学者たちの中でもとりわけ注目すべき思想家である。そして、この「魂」をどのような物質原理あるいは生命原理として理解するかは、ヘラクレイトス哲学における最も根源的な問題の一つである。

第二章では断片36の解釈を通して、ヘラクレイトスの魂概念の物質的位相を検討する。彼は同断片において、自然科学的な魂把握の流れを継承しつつ、魂を水や土へと物質的に変化するものとして語っている。これまでの断片36解釈では、ヘラクレイトスの魂が質料的な火や空気に転換するものだと見なされたり、あるいは終末論的に死後の魂が物質的なものに還元される過程がそこに想定されてきた。G. S. カークやC. H. カーンの解釈は、ともに火や空気などの魂の質料的側面を強調しつつ、マクロコスモスの自然科学的変化過程の一環として魂の変化を捉えている。しかしそのような解釈では、身体とその外部の自然科学的変化の中での魂の生成消滅を、断片36の言明に即したかたちで説明できない。論者は、これらのマクロコスモス

的解釈に反対して、断片36での自然学的変化をミクロコスモス内の生理学的変化（すなわち血液、肉や骨への相互変化によって魂が成り立つ過程）として解釈するべきであると主張する。ただし従来の生理学的解釈では、ただ機械論的に生理学的変化が説明されているとしか見なされてこなかった。論者はそのような解釈をも批判し、むしろ別の意味での生理学的解釈を提示している。すなわちヘラクレイトスの魂概念は、有機体内にたえず生起している生と死との統一性という観点から捉えられるべきであり、さらに「自己」として個をとりまとめる魂概念にも連動した「身体的結合力」として理解されるべきであることを指摘する。このようにして、「魂」の生成変化についてのヘラクレイトスの言説においては、物質の有機的連関という側面から「生命」そのものが成立する基礎が示されているのである。

第三章では、断片85の「魂」概念の解明を中心にして、心的過程についての基本的考察が試みられる。当該断片で語られる「魂」と「テューモス」との対立は、「理性」と「感情」との対立に通じるものであるが、「魂」が倫理的ないし理性的な「自己」の担い手として想定されていると見なされるような文脈においても、生理学的変化との対応を基礎においたものとして語られているのだとする解釈を、断片の解明を通じて明らかにする。論者は、まず魂と火とを同一視する解釈を斥け、さらに医学的著作などの資料を手がかりに、「魂」とテューモスとの対立関係を明確にする。すなわちテューモスとは、身体的な均衡が崩れて熱が過剰になった状態であり、ヘラクレイトスはテューモスによる作用に対して、身体全体の有機的連関からそれを緩和し調和を保持するものとして魂を位置づけているとする解釈を提示する。論者によれば、魂の知的側面は生理学的変化と矛盾しないばかりか、むしろ同じ物質的位相を保ちつつ説明されるべきものである。

第Ⅱ部（第四章から第七章）においては、ヒポクラテス医学を中心に、広範な資料に基づいてヘラクレイトス説と医学理論との結びつきを検証している。古代ギリシアの哲学と医学が相互に密接な関係にあったことは、これまで繰り返し指摘されてきた。前四世紀以降にその大部分の著作が成立したと推測される、いわゆる「ヒポクラテス集成」（*Corpus Hippocraticum*）は、多様な初期ギリシア医学思想を集成したものであるが、その基礎的な理論はソクラテス以前の自然哲学における物質観を継承・展開し、あるいはそれと対立・拮抗することによって形成されていった。本論文の第Ⅱ部で扱っているのは、この「ヒポクラテス集成」をはじめとしてヘラクレイトスの言説の特徴を引き継いだいくつかの医学的著作である。

ヘラクレイトスとギリシア医学理論との実質内容における結びつきは、これまでの研究者たちによって十分な仕方で論じられきたとは言えない。多くの研究者たちは、ヘラクレイトスの「断片」を解釈する上で、「ヒポクラテス集成」を重要な情報源として取り上げてこなかったし、その思想的関連性の意義も十分には問われてこなかった。またギリシア医学史家の側においても、ヘラクレイトスが医学史に積極的に関与しようような見解を持っていたという可能性は特に注目されてはいない。たとえヘラクレイトス哲学に医学思想へ展開し得るような要因が含まれていたとしても、それはエンペドクレスやアナクサゴラス以上に顕著なものとして医学思想へ結びついていったと言い難いというのが一般的判定である。本論文の第Ⅱ部では、このような従来のヘラクレイトス解釈、またはギリシア医学史解釈において見落とされてきたヘラクレイトスと医学理論との連携に注目し、それを具体的なテキストの中で論証する。

第四章では、初期ギリシア医学史上最初に生理学について詳しく語ったとされるアルクマイオンの説とヘラクレイトスの説とに共通する思想基盤を確認し、さらに「ヒポクラテス集成」[とくに『古い医術について』（*De vetere medicina*）と『人間の自然本性について』（*De natura hominis*）]における体液の混合（クラーシス）説とヘラクレイトス説との関係を明らかにしている。論者は、「ヒポクラテス集成」中の主要な論考において示唆されている体液説が、アルクマイオンのイソノミアー説と共に、反アトミズ的な身体観を基盤としながらヘラクレイトスの「対立の一致」に遡源するような特質をもつものであることを指摘する。そしてピュタゴラス派やエンペドクレスのそれとは異質な系統として位置づける。すなわち理念的で抽象的傾向を持ったピュタゴラス派およびシケリア派（エンペドクレス）のクラーシス説と、それに対して経験的で事象的な傾向を持ったアルクマイオン—ヘラクレイトス—ヒポクラテス派によるクラーシス説という二つの主要な医学史的展開の対比を明確にしている。

第五章では、ヘラクレイトスの教説が医学理論へと受容されていった事実の最も鮮明な手がかりとして、表現上きわめて顕著なヘラクレイトスの特徴を持った『養生法について』（*De victu*）と『栄養について』（*De alimento*）を取り上げて検討する。まず第一の論点は、「ピュシスは隠れることを好む」（B123）としたヘラクレイトス哲学が、医学文書における

「予見」の理論の基調となっているということにある。論者は、この二つの医学的著作に確認されるヘラクレイトスの言明が、人間のピュシスの予見の必要性を位置づける上で、そこで展開される医学理論の基礎的な土台を形成するものとなっているという点を明らかにしている。次いで、第二の論点として、ヘラクレイトスによる説明形式（すなわちロゴスの教説）が、「同時相即的に再構成される生命現象」の説明に独自の視点を導入させたものとなっていることを指摘する。すなわち、医学理論に共通して見られる「栄養摂取」や「体液の共流」の生理学のプロセスにおいて、絶えざる同化と異化の相互作用が繰り返され、それを通じてのみ生命が保持されるという基本的前提と深く結びついた仕方、ヘラクレイトスの「対立の一致」説が受容されている点を、論者は詳細に論証している。

第六章では、プラトンにおけるヘラクレイトス哲学と医学理論の結びつきを検討している。『饗宴』(Symposium)においてプラトンは、医者エリュクシマコスにヘラクレイトスの断片を引用させつつ、対立と調和の関係をめぐるエロース論を語らせている(185E6-188E4)。論者は、このエリュクシマコスの医学説が、『養生法について』の議論と連絡を持ちながら、ヘラクレイトスと医術の関わりをさらに強調するものである点を明らかにしている。また、エリュクシマコス演説と「ヒポクラテス集成」の医学理論との関係だけでなく、『饗宴』後半部におけるディオティマのエロース論との関係をも視野に入れて、ヘラクレイトスと医学理論との繋がりをプラトンがしっかりと念頭においていたという点にも論及している。

第七章では、アリストテレスの生理学の議論に着目しながら、ヘラクレイトスと医学理論との繋がりを検証している。まず、アリストテレスの『自然学小論集』(Parva naturalia)に見られる「生命熱」の説明には、ヘラクレイトスの「火」と「流転」の思想の援用が見られ、「生命熱」による物質代謝の現象が、ヘラクレイトスにおけるコスモスの有機的連関の中に成立する「対立の一致」の原理を背景において説明されていることが指摘される。さらにアリストテレスの生理学において、「生命熱」や「プネウマ」を生気論的に位置づける(比較的一般的な)解釈に対して反論を提示する。そして、それらの論点を通じて、コスモスの流転性とその恒常的な維持とを「火」の理論によって説いたヘラクレイトス哲学が後のギリシア医学思想へとどのような展開をみせたのか、その一つの道筋をアリストテレスを手がかりにして明らかにしている。

最後に「結論」において論文内容の全体を総括しつつ、古代ギリシア医学思想における基本的な生命事象の理解の根底には、一貫してヘラクレイトス的な「対立の一致」の思想があることを再確認し、同時にヘラクレイトスの「対立の一致」は本来生命事象や身体的有機性についての認識と深く結びついたものであったことを指摘する。

論文審査の結果の要旨

ヘラクレイトスは初期ギリシア哲学者の一人で、彼の著作として、およそ130のアフォリズムの断片が今日まで伝えられている。古来彼は「万物流転」を唱えた人として知られているが、そうした伝統的なヘラクレイトス理解に対して、20世紀半ばからは、むしろ世界の表層に見られる「流転」的相貌の根底にある持続的定常性を論ずることが彼の本来の立場であったとする解釈が提出されて、次第にむしろ有力なものとなりつつある。こうした趨勢の中で論者は、古来の理解のもつ意義を改めて捉え直し、同時に当の「万物流転」の思想こそが世界の定常的持続を保証する根拠であるとする解釈によって、「対立の一致」(すなわち「一致の対立」)に焦点を当てた新たなヘラクレイトス像を提出する(第Ⅰ部第一章)。その上で、論者は、ヘラクレイトス思想において顕著に見られる「魂」概念とそれに関連する諸断片に新たな視点からの考察を加え(第Ⅰ部第二章・三章)、さらに、その成果をギリシア医学思想の展開と関連づけることによって、ヘラクレイトス思想がこの領域に及ぼした直接・間接的な影響を、初期ギリシア医学者からプラトン、アリストテレスにわたる主要な思想家の著作との綿密なつき合わせを通じて、具体的に解明している(第Ⅱ部)。本論文は、全体として、ヘラクレイトス哲学の根幹を問い直すとともに、それを踏まえた新たな観点から、ヘラクレイトス思想の後代への展開において従来注目されることのなかった側面を明らかにしたものであるとして、その独自性においても高く評価されるに値する。以下、論旨展開に従って、主要な論点を列挙摘記する。

(1) 論者は、まず第一章において、伝存するヘラクレイトス断片を周到に総覧することによって、上述の二つのヘラクレイトス解釈の流れを再検討し、「流転」性と「定常」性の二局面は、彼にとって、ともに世界の実相をなすものであって、両者の相互的相補関係においてこそ、世界は成立し存続するという観点、すなわち「対立の一致」(および「一致の対立」)が彼の根本的立場であった、とする新たな解釈を提出する。そのさい、特に「川の流れ」についての諸断片(断片12, 49a,

91など)の精細な解釈は、それ自体としてすぐれたものであり、きわめて効果的に立論全体の基礎を支える議論となっている。また「火」という存在位相の内実の吟味(断片30, 31など)においても、従来の解釈のレベルを越えた独自の思想的ダイナミズムを引き出し、ヘラクレイトスにおける流転性とロゴス性の逆説的な統一を説得的に論じている。

(2)「魂」概念は、初期ギリシア哲学においては、ヘラクレイトスにおいてはじめて顕著に現れるものであるが、論者は、以上のようなヘラクレイトス解釈に連動して、これまであまり注意されてこなかった生命論・生理学ないし心身活動論の側面からの断片解釈に新たな可能性を開き、これらの領域において、「対立の一致」を強調する立場からの知見を加えることに成功している。特に第二章において、議論の余地の多い断片36の解釈を通じて、物質過程に対応づけられた限りでの魂のあり方を読み取り、身体的物質代謝の流転性と身体的結合力としての魂の統一機能とにおいて成立する生命事象に、「対立の一致」の典型を見いだしていることは、当該断片およびヘラクレイトス解釈の新生面として注目される。

(3)以上のようなヘラクレイトス解釈にもとづいて、ギリシア医学思想の展開との関連を跡付けた第Ⅱ部の議論は、全体として、従来ほとんど着手されることのなかった主題に取り組んだものであり、論述の細部になお疑義の余地を残すところもなしとしないものの、斬新で興味深い論点に富んでいる。第四章において初期ギリシア医学の成立過程に新たな観点を導入し、ヒポクラテス医学派の中心理念をなす「クラシス(体液の混合)説」の背後に上述のようなヘラクレイトス思想の影響を指摘していること、第五章において、二つのヒポクラテス医学文書『養生法について』および『栄養について』に即しながら、単に表現上のものにとどまらぬヘラクレイトス思想の浸透を、医学的な「予見」の理論的背景、あるいは栄養摂取や体液機能などにおける生理学的な異化・同化作用の捉え方の分析を通じて明らかにしていることは、とりわけ独自性が発揮された成果として評価されるべきものである。

(4)プラトン『饗宴』のエリュクシマコス演説を扱った第六章、アリストテレス『自然学小論集』における「生命熱」の議論を扱った第七章においても、論者がヘラクレイトス理解において強調する、身体的物質過程と生命原理としての魂の成立基盤との有機的一体性という観点が有効に働いている。その結果、当該個所のそれぞれにおける医学・生理学的議論内容に、ヘラクレイトスの要因がどのように積極的な意味を担って織り込まれているかが、従来指摘されることのなかった仕方で、明らかにされている。

以上のように、本論文はヘラクレイトスの思想を独自の視点から捉え直すとともに、それがギリシア医学思想の展開において担った役割を明らかにしようとした意欲的なものであり、有意義な成果として高く評価することができる。ただし、ここに扱われている多様な医学・生理学思想の諸相には、いずれもヘラクレイトス的な「対立の一致」の立場との呼応が十分に認められるにせよ、必ずしもそのすべてがそこに淵源するものであるとは、なお断定できない場合もあるようにも思われる。その点をより明確にするためにも、特に「ヒポクラテス集成」については、その主要論考における「クラシス」説などの解明を通じて、ヘラクレイトスとのより実質的な関連を明らかにすることが、さらに要求されよう。しかし、そうした議論強化は、考察範囲をヘレニズム期の医学思想にまで広げることとともに、今後引き続き取り組まれるべき課題となるものであり、本論文はそれ自体として十分な評価に値する。

以上、審査したところにより、本論文は博士(文学)の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2003年5月24日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。